

イギリスへの半年の留学から帰って来てのこの数カ月間のあいだ、再会した友人知人に留学についてよく尋ねられた。みんな口を揃えて「留学どうだった？」と聞いてくるのだけれど、その度に僕は何について話せばいいかさっぱり分からなくなってしまふ。日中ずっと天気が悪かったことや、寮のシャワーがボロボロだったこと、学校の友達とロンドンの片隅の古いカラオケに行ってどこかの国の辛い麺料理を食べたこと、話したいことは山ほどあるのに何を話せばいいか迷い、挙句「良かったよ」となんともざっくりとした返答で終わらせてしまふ。「ロンドンで何を学んできたの？」という質問は、だから僕にとってはとても応えやすく、ありがたい尋ね方だ。もちろん学んできたことだって、話さきれないほど沢山ある。英語の話し方は当たり前として、飛行機の乗り方や一人旅の楽しさ、イギリス風のジョークや国際ビジネスなんかも学んできた。でも中でも僕が真っ先に思い浮かべるのは二つ。おいしいマヨネーズの作り方と、ポップコーンの作り方だ。

ロンドンで僕が住んでいたのは、大学からほど近い学生寮だった。各部屋には机やベッドのスペースと、シャワーとトイレがあり、キッチンと廊下は六人ずつで共用、居住者の大半は僕のようなイギリス外からの留学生だった。僕はオランダ、イタリア、スロバキア、コロンビア、バーレーンの学生と同じフラットで半年を過ごした。ロンドンの物価は信じられないくらいに高い。外食なんて毎日できるものではないから、嫌でもキッチンを使うことになる。そこでルームメイト達と並んで料理を作り、夕食を共にするうち、入居当初に比べて、彼らと自然な会話ができるようになっていった。入居して間もなくの頃は、自分の話す英語と、ヨーロッパ人の友人たちの英語との差を前に、ただただ黙って会話を見守るしかなかったのが、次第に会話に加われるようになり、はさめる語数も少しずつだが増えていった。「初めはシャイなのかと思ったけど、最近はどんどん英語も上手くなってるし、良いやつなんだって分かった」ルームメイトの一人にそう言われたときは涙が出るほどに嬉しかった。それでも、それぞれの訛りを持っているルームメイト達の言葉を全て聞き取るのは難しかった。中でもコロンビアからの留学生とは、なかなか会話を続けることができなかった。コロンビアで英語を学び、ワシントンで二年働いていたという彼の話すスペイン語訛りの英語を聞き取るのは、僕にとっては至難の業で、他のルームメイトとは自然に意思疎通できるようになってからでも彼との会話はぎこちないままだった。けれど会話ができないというのは、仲が悪いということにはならなかった。彼は料理が好きだった。故郷の料理を作っては、友人たちを呼んで試食させて自慢した。なんだかよく分からないその料理たちの名前は全く覚えていないけど、そんなにおいしいとは思えなかったその味はまだしっかり覚えているし、ウマイだろ？と聞かれて、うんウマイ、と答えた時の気持ちも色褪せず自分の中にある。また彼は、僕が短時間で適当に作った晩御飯（大抵は野菜と肉類を醤油で炒めただけのもの）を見ては、やっぱり日本人コックはすごいぜ！と言った。手抜き料理を褒められた時の、何とも言えず申し訳ない気持ちもはっきりと覚えている。

僕が近所のスーパーで買って来たマヨネーズを使って料理をしていると、彼は「わざわざ買わなくても作ればいいのに。その方が何倍もウマイぞ」と言った。そして僕の返事もログ

に聞かずにさっさと作り始めてしまった。まず卵と刻んだニンニクをミキサーに入れて混ぜる。そこにオイルを少し入れて卵と良く混ぜ合わせ、また少量入れては混ぜ合わせを繰り返す。最後にお好みで唐辛子の粉末を加える。説明しながらも手際よく作った“アヨリ”（彼は確かこう呼んでいた）は、なるほどおいしかった。僕はその後もなにかにつけて、彼にこのマヨネーズをねだった。作り方は教えたんだから自分で作ればいいのに、と言いながらも彼は毎回作ってくれた。マヨネーズ用にポテトフライも作ってくれた。僕達はそれらを、ほとんど無言で食べた。最初の頃に感じていた沈黙の気まずさは、この頃には心地いい落ち着きに変わっていた。

留学期間が終わりに近づいた、僕が日本に帰る一週間ほど前の夜、彼から突然、キッチンでビールを飲もう、とメッセージで誘われた。慌ててスーパーで数本ビールを買ってキッチンに行くと、彼はもう飲んでいた。「俺がいっぱい買ってきてるからもうビールなんて買わなくて良かったのに」と言われた。僕達二人は缶のビールを飲みながら、彼が持ってきたパソコンで「世界の面白失敗映像」的な動画を、ただひたすら見た。毎回大げさなアクションをとりながら、彼は笑った。僕も笑った。途中で彼は学校で買ったという豆をとりだした。それをおもむろにフライパンにのせて火をかけると、ポンッという音がして弾けた。ポップコーンが豆から、フライパンで作れるということ、僕はそのとき初めて知った。僕達は弾けるそばからポップコーンを掴み、食べながら動画を見た。合間にぼつりぼつりと話をした。交わした言葉は少なかったけれど、分かったことは多かった。子供の頃耳の形がヘンでいじめられて、それが嫌で整形したこと、今の彼女はイタリアで勉強していて、それが一体通算何人目の彼女なのかさっぱり分からないこと、何故か三島由紀夫が好きで、でも何故か金閣寺は読んだことがないこと。

その夜のことは、これからも忘れないと思う。教えてもらったマヨネーズと、ポップコーンを作るたびに、つられて思い出さだろう。五人のルームメイトの中で、彼とが一番言葉は通じなかったけれど、一番親密になれたのは彼だったと思っている。どこの国の、どんな人でも、人間はみんなどこに行っても大体同じようなもんなんだなあ、と、一緒にポップコーンを食べながらしみじみ思った。話す言葉と、見た目の顔かたちが少しずつ違うだけで、みんな同じように、それぞれの生活を生きているだけなんだと思った。それは普段、同じ言葉を話す、同じ人種の人たちとばかり接しているからこそ、逆に気付きにくいことなんだと思う。違う国に行って、さらに違う国の人と、違う言葉で話して、みんな同じだと気が付いた。わざわざイギリスまで行って何をしているんだと言われてしまうかもしれないが、僕はそれだけでも、留学に行った意味はあったと思う。